

クロウサギを守り、ノネコを殺す理由——奄美大島「猫30匹殺処分計画」の波紋 #2

 笹井 恵里子

2019

genre: ニュース, 社会

 1

6月12日に参議院議員会館講堂にて「奄美大島『ノネコ管理計画』見直しを求める院内集会」が行われ、福岡大学の山崎好裕教授や、奄美大島で猫の無料不妊手術病院を運営する佐上邦久氏、獣医師の齊藤朋子氏、朝日新聞特別報道部の太田匡彦記者、私が登壇した。ちょうど、虐待罪の厳罰化などを盛り込んだ「改正動物愛護法」が成立した日だった。興奮冷めやらぬ福島みずほ議員や川田龍平議員をはじめ驚くほど多くの国会議員も入れ替わり立ち替わり集会に訪れ、ノネコ管理計画の「見直し」に賛同する意見を述べ、「調査をやり直さないと、税金の使い道としてどうなのか？」という声も挙がっていた。



獣医師の齊藤朋子氏



クロウサギの死因トップは「交通事故」

集会で山崎教授は、「私は経済学の専門ですから」と前置きした上でこう話していた。

「ノネコが希少種にとって脅威になっている可能性があるといわれますが、想定されるあらゆることに可能性はあります。可能性があるかどうかではなく、それがどのくらいの大きさなのか、他の可能性に比べて大きいのか小さいのかが問題でしょう。ノネコ対策を最優先にして、そこに税金を投入しなくてはいけないほどの必要性は感じられません」

環境省が発表しているクロウサギの死因調査（2000年～2013年）を見ると、犬や猫に捕食されたと断定されたものはわずか10パーセント。原因が判明している死因では交通事故が最も多い。とりわけ2018年は前年より約2倍の死因が交通事故によるもので、過去最多であった。希少種保全のためには国会を招き

年は前年より5匹多い39匹が交通事故で死ぬといつ、過去最多であった。希少種保全のために税金を投入した政策を実行するというなら、まずは交通事故死への対策を第一に考えるべきだろう。

また、「ノネコ管理計画」の要となり、国が公表した3つの数値があやうい。

1) 「クロウサギ」は10倍に増えていた

守りたいとされるクロウサギは“絶滅の危機”どころか食害が出るほど増えていると、地元のガイドから話を聞いていた。増えた理由は、かつて人が野に放って莫大に増えたマンガースの駆除が進んだためという見方が強い。

しかし環境省は2003年、つまり16年も前の調査結果で推定生息数「2000~4800頭」とし、以降は公に数値を公表していない。本来なら計画のスタート時点で、現在のクロウサギの数を公表し、もしかつてより減少傾向にあるのなら、「何匹まで回復させる」というビジョンを描くべきではないのだろうか。



近くに奄美ノネコセンターがある



現在のクロウサギの生息数はどれほどであるのか。これについては今年3月、朝日新聞の太田匡彦記者がスクープした。

〈「絶滅危惧種」で生息数が数千匹と推定されているアマミノクロウサギについて、環境省が2015年時点で、奄美大島（鹿児島）だけで約1万5千~3万9千匹にまで回復しているとの推定結果をまとめたことがわかった〉（3月25日付朝日新聞夕刊）

なんと環境省は2015年時点で、クロウサギが12年前の2003年より10倍以上増加しているという実態をつかんでいた。なぜそのデータを伏せたまま「ノネコ管理計画」をスタートさせたのか。



2月に出会ったクロウサギ



さらに記事では環境省が2023年度までに、クロウサギを今より絶滅の危険度が低いランクに見直す可能性があることにも触れている。集会で登壇した太田記者は、今から4年後に絶滅危惧種ではなくなるかもしれないクロウサギのために、2027年度までノネコ管理計画が続けられることの矛盾点を指摘していた。

2) 「ノネコ」は推定されるほどいないのではないか

ノネコの数、ノネコ管理計画では約600~1200匹と推定され、環境省は年間300匹捕獲する目標を設定した。しかし、2018年度は環境省が掲げる目標値に遠く及ばず43匹の捕獲数だ。環境省奄美野生生物保護センターは、

「捕獲の技術をこれから改革していかなければならない。技術が未熟だというところがあって、猫の数が想定より少なかったということではない」と、あくまで推定生息数600~1200匹という数値は正しく、年間300匹捕獲できるという姿勢を崩さない。

もう一つ、気になるのはノネコの餌の量だ。〈ノネコ1頭が1日に摂取している餌の量の平均は、378・4gと見積もられ、この量はケナガネズミとクロウサギでは1頭ずつ必要になる〉ため、〈希少種に及ぼすノネコの捕殺影響は甚大なものとなる可能性が高い〉と、同計画書にある。

しかし、これまで奄美大島からノネコ8匹引き取ってきた前出・獣医師の齊藤氏は「体重4キロの成猫でキャットフードなら1日約90グラム前後が標準量」と話す。この約4倍もの量を野生の猫が日々食べて初めて〈ノネコの捕殺影響は甚大なものとなる〉のだ。そしてこの見積もり値が引用されている論文では「ノネコによって年間1万匹のクロウサギが捕食されている可能性」とある。考えてみてほしい。もし本当に「600~1200匹のノネコ」が、それだけの勢いで「2000~4800匹」のクロウサギを摂取しているようなら、クロウサギはとっくの昔に絶滅しているのではないだろうか。



ノネコを受け取る齊藤氏



3) 「野良猫」も推定数ほどいなかった

「野良猫が山中に入ると、ノネコとなる」という理由から、市街地に生息する野良猫の数も重要だ。奄美大島ねこ対策協議会では野良猫の推定生息数（奄美5市町村）を5000~1万匹と公表していた。奄美大島5市町村で実施している野良猫の不妊去勢手術数は年間1000頭を予定しており、それでは繁殖スピードに到底追いつかない。

そこで公益財団法人どうぶつ基金理事長佐上邦久氏は昨年8月、奄美市内に無料不妊手術病院「あまみのさくらねこ病院」を開設した。市街地の野良猫に不妊手術を施すことが奄美大島から猫を減らす有効な策だと考えたのだ。ところがあふれるほどいるはずの野良猫も、行政が推定するほど見かけなかったという。





あまみのさくらねこ病院は6月末に閉院



「不妊手術を急ぐのが奄美大島から猫を減らす有効な策だと思って、寄付金の1000万円を投じて病院を建設し、10か月間運営してきました。役員は無報酬で、不妊手術はすべて無償で行いました。しかし行政の野良猫推定生息数は嘘八百だったんです。

私たちは奄美市内10か所で見回りを行い、住民への聞き取りと猫の数を調査しました。その結果、野良猫は行政が公表する3分の1、2000匹と算出しました」

あまみのさくらねこ病院が実施した「ノラ猫調査」を見せてもらった。行政と同様の地域で調査を行い、一匹一匹の野良猫の写真もきちんと撮影している綿密さだ。

「ノラ猫調査」によると、野良猫の90%は不妊手術を終えていた。あまみのさくらねこ病院は不妊手術をした目印として猫の耳先をさくらの花びらのように「V字カット」するのだが、その印があったということだ。

不妊手術をしても、一代限りのその猫がクロウサギを襲う可能性はもちろんある。しかし、前述した通り、ノネコを捕獲しなくても、クロウサギは2003年から2015年までの間に10倍以上も増えている。今後市街地の不妊手術を終えた野良猫がノネコ化したとしても、クロウサギの頭数に壊滅的なダメージを与えるとは考えにくい。

これらの状況から、森林内のノネコを排除するノネコ管理計画を残り9年も実行すること、そこに税金を投入することの意義が今問われている。

00

9/06/30

11

